

本学会長アルバート・ネルソン・マーキス生涯功績賞を受賞する

■各分野で著名な人物の略歴などを掲載し発行する年鑑の紳士録「Marquis Who's Who」に掲載された人物が受賞するもので、科学分野では独創的な研究を遂行している研究者が選ばれる「The 2018 Albert Nelson Marquis Lifetime Achievement Award」に、本学会長の宗像恒次筑波大学名誉教授が受賞されました。



1948年 豊中市生まれ <経歴> 保健学博士(東京大学医学系研究科)、ハーバード大学医学部客員研究員、国立精神・神経センター精神保健研究所研究室長、筑波大学大学院教授ヒューマン・ケア科学専攻長、世界保健機関(WHO) 薬物依存局顧問・エイズ世界対策局顧問 <受賞> Outstanding Intellectuals of the 21st Century Award, Cambridge, England, 2010、GREAT MINDS OF THE 21ST CENTURY AWARD, NORTH CAROLINA, USA, 2010、MARQUIS Who's Who in the World, USA, 2010・2011・2012・2013・2014・2015・2017・2018 <現在> 筑波大学名誉教授、筑波大学発ベンチャー(株)SDS CEO、SAT 情動認知行動療法研究所長、NPO法人ヘルスカウンセリング学会会長、日本ソマチック心理学協会顧問、日本保健医療行動科学会顧問

選出された宗像恒次筑波大学名誉教授

■宗像恒次名誉教授は、物事に対する「感じ方」を変えてレジリエンス(復元力)を高めてストレス問題に効果的に対処できる世界でも独自の心理療法の開発に関わってきました。その結果生まれたのが、本学会公認専門資格セミナーで研修されているヘルスカウンセリング技術としてのSAT療法です。今日、いじめ、不登校、引きこもり、ニート、DV、発達しょうがい、ハラスメント、過労死、精神病、自殺、認知症、生活習慣病など、現代社会が抱えている社会問題の解決が求められています。その社会問題の解決には、いずれもひとの多様性との共生、多様性マネジメントが求められています。多様性マネジメントには、多様性に対する負担感や不快さづくりだす無意識(身体違和感)をコントロールするレジリエンス技術(ストレスから常に復元できる技術)が必要です。

■従来の心理療法はどちらかといえば、左脳思考に基づき「考え方」を変えて、感情や行動を変えるというものでした。しかし不安な中で左脳思考させると、解釈⇒思い込み⇒妄想となり、かえってストレスが再生産される結果、感情認知困難度や自己解離度を強めることになり、結局ストレスは身体化、行動化して生活習慣病などの疾患を出現させることとなります。SAT療法は、考え方を先に変えるのではなく、「感じ方」を先に変える心理療法です。ストレスを乗り越えることを困難にさせる身体違和感を光イメージ刺激、顔表象刺激、リズム刺激、皮膚刺激などを用いて、身体良好感にかえることで、ストレスに対する「感じ方」を変え、ストレスをしなやかに乗り越えるレジリエンス(復元力)を高めて、問題の自己解決行動を促す技術を提供するものです。

■特徴として、ストレスに伴う身体違和感をもちいて問題の解決を促すので、①クライアントは必ずしも問題(秘密)を言わなくて済むこと、②精神サイン、行動サインのみならず、身体サイン、霊性サインで示される問題の解決をも促せること、③構造化された(Structured)方法(質問法・傾聴法・回答法・イメージ法など)を使って、ひらめき、連想、直感(Association)という右脳活動による知覚や判断力を促し、自分で自分の問題解決の答えを見出すことを促す技術(Technique)です。最近の著作として、「感情を変える技術」(株式会社SDS出版、047-711-0069、info@kksds.com)があります。